

# 特別支援学校におけるスタートカリキュラムの開発

## —小学部知的障害学級における実践と評価—

岩本伸一\*・江口靖子\*\*・小久保博幸\*\*\*・橋口知\*

(2022年11月16日 受理)

### Development of a Starting Curriculum for Special Needs Schools

#### —Practice and Evaluation in an Elementary School Intellectual Disability Class—

IWAMOTO Shinichi, EGUCHI Yasuko, KOKUBO Hiroyuki and HASHIGUCHI Tomo

### 要約

本研究では、知的障害を対象とする特別支援学校小学部1学年において、保育所や幼稚園、児童発達支援事業所などでの支援内容を引き継ぎ、新しい学校生活の中で安心して円滑な学校生活をスタートさせるためのカリキュラムについて考察した。実践では、個別の教育支援計画や個別の指導計画との整合性を図りながら、教科横断的な視点と系統性を意図した指導計画の作成を試み授業につなげた。特に、「安心」「成長」「自立」の観点から目指す児童像を明らかにし、児童の思いや願いを基底としながら教師や友達とつなげるための手立てを講じた。その結果、児童は他者とのつながりの中で、学習に見通しをもって取り組む姿が見られ主体的な活動を引き出すことができた。学級の枠を超え1学年部全体で協働的な指導体制を築き、児童の実態把握や情報共有を基に授業を行ったり、上学年との交流学习を取り入れたりしたことも効果的であった。今後は学校全体のカリキュラムマネジメントの中で、他学部を含めた系統性のある全体指導計画への位置づけを図るとともに、児童の変容を客観的に評価する方法を確立し、改善できるような体制づくりが必要になってくることを課題としてあげた。

**キーワード**：スタートカリキュラム、特別支援学校、知的障害、就学時連携

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

\*\* 鹿児島県立鹿屋養護学校 教諭

\*\*\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

## 1. はじめに

近年、特別支援学校へ就学する児童については入学者数・在籍者数の増加が見られるとともに、障害の程度や特性の多様化が進み、一人一人に応じた支援の更なる質の向上が求められている。就学前の保育所、幼稚園、児童発達支援事業所等での支援環境が整い、早期からの療育が充実しつつある今、いかに入学後の学校教育の中で、その支援の継続を図るかが大きな課題となっている。

特別支援学校における一人一人の適切な支援のためには、全体指導計画と個別の教育支援計画及び個別の指導計画の整合性を高める必要があるが、実際の授業場面では、これらの計画が生かされることなく画一的な指導になったり担任個々の判断に委ねられたりといった状況が散見される。新入学の児童に対しても、小学部1年生としてのスムーズな学校生活への適応を目指す組織的・系統的な取組が進んでいない現状である。一方、小学校では文部科学省(2015)が配布した「スタートカリキュラムスタートブック」などが示すように、小1プロブレム等に対応するための全国的な研究と実践が、生活科の実践を中心に進みつつある(安藤2020、松崎2018など)。しかし、特別支援学校に関しては、その取組がほとんど見当たらず、児童生徒のニーズに応じたカリキュラムマネジメントを促進する中で重要な課題の一つとしてあげられる。

以上のような現状を踏まえ、本稿では主に知的障害特別支援学校小学部1年生における、スタートカリキュラムに視点をあて、具体的な実践と評価を通して、その在り方を考察する。

## 2. 特別支援学校とスタートカリキュラム

### 2. 1. 保育所、幼稚園、福祉施設等と学校との接続について

学校教育においては、小学校及び特別支援学校の学習指導要領(2017)が改訂され、新しい時代の特別支援教育へ移行されつつある。特別支援学校新学習指導要領(2017)では、児童の調和的な発達の支援のために、家庭及び地域並びに医療、福祉、保健、労働等の関係機関との連携を図り、長期的な視点で教育的支援を行うことの重要性が強調されているところである。

また、近年の就学前における特別な支援を必要とする子どもの療育については、国の施策等に基づき福祉を中心に急速な発展がみられている。これまで、保育所や幼稚園等を中心に通常の集団の中で特別な配慮の下、支援が行われてきたが、児童福祉法改正(2012)で児童発達支援事業所が位置づけられたのを機に、支援の量・質共に充実の一途をたどっている。厚生労働省が全国共通の枠組みを示した「児童発達支援ガイドライン」(2017)の下、地域の保健、医療、障害福祉、保育、教育、就労支援等の関係機関との連携を深め、切れ目のない一貫した支援を提供するための取組が進められつつある。

さらに、保育指針(厚生労働省2017)においては、「特別な支援を要する幼児について、家庭や関係機関と連携した支援のために計画を個別に作成すること」、また幼稚園教育要領(文部科学省2017)においては、「家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う関係機関との連携を図り、長期的な視点で幼児への教育的支援を行うために、個別の教育支援計画を作成し活用すること」と

し、関係機関との連携を図りながら計画的な支援がみられる。ただ、保育所、幼稚園、児童発達支援事業所等では、入学を控えた時期にアプローチプログラムを計画的に実施している機関はまだ少ない。学校生活へスムーズに適応できるための特別な配慮や手立てが個別になされている園もあるが、その情報が引き継がれるまでには至っていない現状がある。アプローチプログラム等の開発と実践に加え、アプローチプログラムとの接続が可能になる体制づくりが待たれるところである。

このような状況の中、就学前の関係機関と特別支援学校との円滑な接続は、これまで以上に重要な役割を担っている。しかし、受け入れ側の学校現場では依然として障害のある子どもやその保護者にとって、相談体制や情報提供が不十分であったり切れ目のない支援体制の中で安心して学校生活をスタートさせる状況まで至っていなかったりするものが現状である。

## 2. 2. スタートカリキュラム編成の意義

スタートカリキュラムスタートブック（文部科学省ほか2015）によると、スタートカリキュラムとは、「小学校に入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラム」としている。特別な支援を必要とする児童の場合は、幼稚園・保育所等に加え、就学前に並行通園していた児童発達支援事業所等での学びと育ちも、その基礎に含めることになる。就学前の支援内容と子どもの変容については、特別支援学校にとっても指導計画等を作成する上で有効な手掛かりとなるため、引継ぎ書や移行支援計画等の中に記入欄を設けるなどの工夫が必要になってくると思われる。

このように、支援を必要とする児童が新しい環境での生活にスムーズに移行していくためには、これまで育まれてきた資質や能力を、学校生活の中での学びにつなげていく適時性のある合理的配慮が必要になる。特に、社会生活や集団生活への適応力が未発達な特別支援学校の児童にとっては、一人一人の障害の特性や発達段階を踏まえた丁寧できめ細かい学習環境と手立てを整えることが重要である。そのために、特別支援学校ならではのスタートカリキュラムを充実させ、それぞれの児童の主体的な学びへとつなげたい。

## 2. 3. 小学部における教育課程の編成と実践の現状

筆者が、県内特別支援学校 16 校（高等特別支援学校を除く）へ実施した調査(2022)によると、いわゆるスタートカリキュラムを作成している学校は1校のみであった。特別な作成はないが、スタートカリキュラムを意識した計画を作成している学校が6校、スタートカリキュラムを意識した作成ではなく、従来の指導計画で対応している学校が9校という結果であった。調査の上から県下の特別支援学校では、生活科を中心に実践が充実しつつある小学校に比較して、カリキュラム作成への取組が進んでいない現状がうかがえる。ただ、特に知的障害を対象とした特別支援学校においては、従来、小学部1年生での日常生活の指導や生活単元学習等を中心に、初めての学校生活を円滑にスタートさせるための指導計画を編成し、実践を積み重ねてきている経緯がある。本調査の6校がこれに当たると思われるが、例えば4月当初、生活単元学習で「いちねんせいになって」、「み

んなであそぼう」(県内の知的障害特別支援学校の指導計画より)などの単元を組み、学校生活に見通しをもちながら、新しい学校生活への意欲を高めることを目的とした授業が行われている。また、自立活動において、入学当初の児童の適応状況に応じて自立的な学校生活への基盤を培うための支援がなされるといった独自性も有している。

しかし、学校全体での組織的・体系的なカリキュラムマネジメントの中で、就学前の支援内容を考慮に入れた全体指導計画の作成やそれに基づく授業実践と評価の在り方については、今後の研究と実践の蓄積が待たれる状況である。

本研究では、これらの現状を踏まえた上で、特別支援学校(知的障害対象)小学部でのスタートカリキュラムの在り方について具体的な実践を通じた考察を試みる。

### 3. 実践事例

#### 3. 1. カリキュラム開発に当たって

##### 3. 1. 1. 就学前の支援内容の確認、保育所、児童発達支援事業所との情報交換

県内特別支援学校に入学する児童においては、県教育委員会から通知される入学予定者名簿に基づき、就学予定児等面接相談会を1月に実施している。この本人及び保護者との面談等を通して、児童の実態や保護者のニーズについて把握している。面接会では、就学予定児の行動観察を行ったり保護者から障害や生活状況、生育歴等の聞き取りを行ったりしている。また、入学前における保育所や療育施設等からの資料を基に引継ぎを行ったり、就学前の関係機関と相談支援事業所等主催のケース会を実施し支援内容等の情報交換を行ったりしている。ここでは、保護者が引き継いでほしい支援内容や不安に思っていることも含め、児童の実態はもちろんのこと保育所や療育施設等での支援内容等についても確認し合う場となっている。就学前のこのような情報交換は、入学後の適切な指導(目標や内容の設定等)と必要な支援(関わり方や環境の整え方等)を検討する上で重要な情報となる。就学時のスムーズな移行支援のために、面接会時の実態把握や、入学前の学校見学での体験活動などを通して、本人及び保護者が安心して就学に向かえるような取組を目指している。

##### 3. 1. 2. 職員間の情報共有、保護者への説明と情報交換

児童の実態等については、就学前においても学部全体で情報共有を行い、スタートカリキュラム作成に生かしている。入学後も学部会等において児童に関する共通理解を図り、全職員による指導・支援への参画をうながしている。保護者に対しては、入学前に学校説明会を実施し、学校生活や学習指導など学校の概要について説明を行うとともに、個別の教育支援計画及び指導計画に関する説明と作成への協力をお願いしている。入学式当日においては、学年PTAを行い入学後の指導内容等について説明し、指導・支援に対する理解を図っている。入学後は、週報等を通じて週計画を提示したり連絡帳を通して学校での児童の様子を丁寧に伝えたりしている。また、年度初めに家庭訪問を実施し、入学後の学校生活及び家庭等での様子等を情報交換し、学校生活に対する保護者の不安を解消し安心して児童を送り出すことができるようにしている。さらに、入学後早い時期の授業参

観や学級PTAを通して、学級経営や担任の指導方針について理解をうながしている。個別の教育支援計画及び指導計画作成に当たっては、個別の教育相談を行い目標や指導内容等の共通理解を図り、保護者の協力を得ながら連携して指導・支援に当たることができるようにしている。

### 3. 1. 3. 教育課程編成上のとらえ方と全体指導計画の作成

表1は、4月から5月半ばまでの全ての単元を配列し俯瞰する単元配列表（全体指導計画）である。1年生のスタートカリキュラムにおいては、生活単元学習・日常生活の指導など各教科等を合わせた指導を中心として、他の教科別の指導等とつながりをもたせた指導計画を作成し実践につなげた。

表1 4月から5月半ばまでの全ての単元を配列し俯瞰する配列表（全体指導計画）

	4月	5月					
生活	日常生活の指導 登校（挨拶、朝の準備）、着替え、排せつ、係活動、朝の会、給食、帰りの会、下校（帰りの準備、挨拶）						
	生活単元学習「（新しい学年）1ねんせいになったよ」 学校生活探検（プレイルーム、校庭、音楽室、食堂、保健室、校長室等）	生活単元学習「はるをたのしもう」 事前学習（遠足、運動会）、季節の製作					
国語	国語「あいさつしよう」 自己紹介（ぼくの・わたしの名前は）、挨拶しよう	国語「これなんだ？あててみよう。」 身近な物の名前、友達の名前、先生の名前					
算数	算数「なかまわけ」「なかまあつめ」 同じ形、色であつめよう						
音楽	音楽「うたでなかよし」 始まりの歌、季節の歌、歌でなかよし（うたあそび）、終わりの歌						
体育	体育「あつまろう・ならぼう・からだをうごかそう」 整列、ラジオ体操、固定遊具遊び、かけっこ	体育「うんどうかい」 整列、ラジオ体操、かけっこ、ダンス					
図画工作	スタートカリキュラムとして各教科等の 指導を関連づけて指導を行う。						
道徳			生活単元学習「もうすぐうんどうかい」 季節の製作（こいのぼり、万国旗等）				
特別活動	入学式 今日から 一年生	身体測定 検査	全校朝会	学部集会 新入生紹介	一日遠足	学級目標・ 係を決めよう	運動会
自立活動	実態把握・指導内容の具体化・指導（個別・集団学習）						

従来の教育課程においては、知的障害学級1～6年生の指導計画として作成されている生活単元学習4月の指導計画「新しい学年」がある。全体指導計画を基に、各学年・学級において児童の実態に応じて指導（単元）計画や授業案を作成し指導を行っている。1年生の4月当初のスタートカリキュラムでは、生活単元学習「新しい学年」の学校生活探検や日常生活の指導の日常生活動作に関する指導などを中心に、教科横断的な視点をもって指導計画を作成し、大単元「がっこうせいかつがはじまるよ」として、学校生活の流れに沿った指導を行うものである。また、児童一人一人の実態は多様であるが、スタートカリキュラムにおいては、「安心して元気に楽しく学校生活を送る児童」の姿を目指し、共通の目標及び指導内容を設定した指導計画を作成している。実際の指導においては、児童一人一人の実態に応じて作成する個別の指導計画に基づいて指導の個別化を図りながら実践を進めている。なお、指導計画は職員間で常に情報を共有しながら、単元等の途中であっても児童の学習状況に応じて柔軟に変更できるものとしている。

### 3. 1. 4. 他の教科・領域との関連

スタートカリキュラムにおいては、各教科等を合わせて指導を行う生活単元学習・日常生活の指導を中心に指導を行うが、教科等を合わせて指導を行う場合、各教科等の目標を達成するために、

目指す資質・能力を明確にして指導計画を作成する必要がある。スタートカリキュラムにおいても、各教科等の目標等を明確にして指導を行い、特に生活科を中心にしながら「子ども自身が活動を自分との関わりの中で捉え、よりよい生活に向けて自分の思いや願いをもって活動し実現しようとする姿」(特別支援学校小学部学習指導要領 2017)を大切にしながら指導を進めている。また、様々な学習に、児童自身が見通しをもって取り組んだり、自分でできることを増やしたりできるような姿を目指していきたい。児童の発達や願いに基づき子ども自身が活動に主体的に向き合うことができるような指導を通して、学習で獲得した力を生活の中で生かし豊かな発達、成長につながるような指導を行うことが重要であると考えられる。

### 3. 1. 5. 授業づくりまでのプロセス

入学後1か月余りをスタートカリキュラムの期間とし、週案を作成しながら授業づくりを進める。その際、学校での様子等、児童の実態を踏まえ目指す姿や授業のねらい等を明確にした計画を立案する。時間割を基本としながらも、児童の生活の流れに沿って学習時間を柔軟に設定し、遊び活動を取り入れ少しずつ学習活動に向かうことができるような週時程や活動内容を計画する。

### 3. 1. 6. 評価

入学後1か月(スタートカリキュラムの実施期間)は、毎週、学年会を実施し児童の学習状況について共通理解を図り相互評価を行う。また、週案を検討しPDCAサイクルの中で授業改善を図りながら指導を進める。単元終了後は、個別の指導計画に基づく評価を行うとともに、指導計画の加除修正を行い、次年度の教育課程(各教科等の指導計画等)作成に生かしていくようにする。

### 3. 2. 目的

本研究の目的は、小学部1年生における新しい学校生活にスムーズに移行するためのスタートカリキュラムについて実践を通して検討することである。児童の就学前の支援状況を明らかにするとともに、学校教育目標の下、全体指導計画と個別の指導計画の整合性を高めた授業計画を作成することで支援の充実を図り、主体的に学校生活を送ろうとする児童を育てるための支援の在り方について考察する。

### 3. 3. 方法

#### (1) 対象

K特別支援学校小学部知的障害学級1年生(令和3年度及び令和4年度入学生)

#### (2) 期間

令和3年度及び令和4年度の4月から5月上旬までの期間

#### (3) 児童の実態

対象となる1年生の児童は、自閉スペクトラム症やダウン症候群の児童、発語がなく自分の気持ちを表現することが難しい児童、簡単な会話や平仮名の読み書きができる児童など実態は様々である。また、新しい環境(人や場所)に慣れるまでに時間を要したり情緒的に不安定になったりする児童もいる。言葉によるやりとりができる児童でも、自分の気持ちを言葉などで表現することが難

しかったり、コントロールすることが難しかったりする児童もいる。日常生活動作については、着替えや食事などほぼ一人でできる児童もいれば、排泄や食事指導など多くの場面で支援を必要とする児童もいる。就学前は、保育所等と療育機関とを並行通園している児童がほとんどで、その実態や支援内容等については、事前に保育所等と引継ぎ会を行ったり引継ぎ資料等を確認したりして、一人一人の実態やニーズ等について把握した。令和4年度は10人（内、9人が知的障害学級に在籍）の児童が入学し、教師や友達とかかわりながら様々な学習に取り組んだ。

### 3. 4. カリキュラム（指導計画）の概要

K特別支援学校小学部では、「児童一人一人の能力や可能性を見出し、日常生活に必要な基本的事項を身に付けるとともに、情緒の安定を図り周りの人と主体的にかかわる児童を育てる。」ことを教育目標とし、一人一人の実態に応じた指導・支援を行っている。筆者は昨年度から2年間に渡り1年生担任として、児童が学校生活に慣れ教師や友達とかかわり、自分らしさを発揮しながら学ぶことを目指して指導に当たっている。学校生活のスタート時において、児童一人一人の実態に丁寧に向き合い、主体的に教師や友達とつながりながら学ぶことができるような指導について、入学後の一か月余りの期間をスタートカリキュラムとして計画し実践を進めてきた。

まず、目指す児童の姿（表2）を明確にし、スタートカリキュラムによる実践が、児童の「安心・成長・自立」につながることを目指して指導を行った。また、スタートカリキュラムを実践する期間、生活単元学習・日常生活の指導を中心として、各教科等の指導を関連付けながら取り組むことができるように計画した。生活単元学習「(新しい学年)1ねんせいになったよ」では、学校生活の初めてを探検する「学校生活探検」を設定し、音楽や体育などの学習に入る前に、校内外の教室や施設などを探検したり、学習する場所や学習の流れ、決まりなどについて知ったり、一緒に学習する友達や先生とのかかわりを深めたりする学習を行った。また、国語「あいさつしよう」の学習内容と関連付けて、一緒に学習する友達や先生に挨拶をしたり自己紹介をしたりする内容を取り入れ、学校生活と学習につながりをもたせた授業を行った。日常生活の指導では、学校生活の流れに沿った学習に、自ら見通しをもって取り組むことができるようにした。見通しをもつこと（例えば、朝の準備が終わったら自由遊び）で、今の学習に自主的に向かい、学ぶ意味を感じて取り組むことができるような活動内容の流れを意識して取り組んだ。

表2 目指す児童の姿

安心	「がっこうってたのしい。」「あしたもがっこうへいきたい。」と、元気に楽しく学校生活を送る子どもたち
成長	「こんなことができるようになったよ。」「ともだちといっしょに〇〇したよ。」と、見通しをもって、自分で取り組んだり友達や教師と一緒にとかかわりながら学んだりする子どもたち
自立	「もっとやってみたい。」「こんなふうになりたい。」と、意欲的・主体的に学びに向かう子どもたち

	4月7日 (1日目)	4月8日 (2日目)	4月11日 (3日目)	4月12日 (4日目)	4月13日 (5日目)	4月14日 (6日目)	4月15日 (7日目)	朝の会までの時間、十分に遊ぶことができるように児童の様子を見ながら(児童の生活の流れに合わせて)、朝の会の開始時刻を設定する。
	入学式	C下校	C下校	C下校	B下校 (給食開始)	B下校	B下校	
	ドキドキわくわく1年生	始まるよ 学校生活						「初めての学習(音楽・体育)が始まるよ」では、スムーズに教科等の学習に入ることができるように、生単「学校生活探検」と関連付けて学習する場所等を確認しながら行う。
1	登校 入学式 学級活動	「学校生活が始まるよ」 登校・朝の準備・自由遊び 朝の会(歌遊び、絵本の読み聞かせ)		登校・朝の準備・遊び 朝の会		登校・朝の準備 着替え・遊び 朝の会		
2		「今日から1年生(学活)友だちいっぱい(自由遊び)」	「1年生になったよ(生単)学校生活探検「外で遊ぼう」」	「1年生になったよ(生単)学校生活探検「うたてなかよし(音楽)」	「1年生になったよ(生単)学校生活探検「集まろう・並ぼう・体を動かそう」(体育)遊具遊び	「挨拶しよう」(国語)	「1年生になったよ(生単)学校生活探検「集まろう・並ぼう・体を動かそう」(体育)遊具遊び	
3		帰りの準備、帰りの会	帰りの準備、帰りの会	帰りの準備、帰りの会	「1年生になったよ(生単)学校生活探検「今日から給食。食堂はどこ?」	「挨拶に行こう」(自活) 感覚運動遊び	着替え	
4	給食準備							教科別の指導では、学校生活に関連する内容を教材として取り扱い、実生活に即して学ぶことができるようにする。
給食	給食・歯磨き							
5	帰りの準備・帰りの会							

図1 週案(第1週)

指導計画の作成においては、目指す児童の姿を意識しながら、学年会において児童の実態に応じて週案(図1)を検討・作成し指導を行った。特別支援学校においては、見えている姿からだけでは、その全てを理解することが難しい児童もいるため、学年会では、教師がどのような意図(願い、ねらい)をもってかかわっていきたいかを明確にした上で、捉えた姿をどう解釈し(「評価」、今後の指導を行っていくか(「改善」)について話し合う場を設定した。

3. 5. 実践の結果

表3は、入学から6日目の指導計画である。朝の会後の2単位時間を、学習内容につながりをもたせた学習活動として指導を行った。

表3 生活単元学習指導計画(入学から6日目)

単元名	「1ねんせいになったよ。(学校生活探検:あいさつにいこう。いっしょにあそぼう。)」	
関連する指導等	国語「あいさつをしよう。」 自立活動「からだをうごかそう。」	
目標	一緒に活動する先生に挨拶をしたり友達や教師と遊んだりする活動を通して、初めての学習活動(自立活動)について、「どこで・だれと・なにを」するのを知り、学習活動に見通しをもち、安心して楽しく学習に取り組むことができる。	
指導の形態	主な学習活動	指導の手立て
国語	・絵本の読み聞かせを聞く。 「はじめまして」 ・自己紹介する。 「ぼく(わたし)のなまえは〇〇です。」	・学習の流れを確認し、見通しをもつことができるようにする。 ・絵本の読み聞かせや歌遊びをすることで楽しく取り組むことができるようにする。
生活単元学習	・学校生活探検に行く。 「自立活動の学習がはじまるよ。」 ・自立活動の先生にあいさつに行こう。 「自立活動室ってどこ?」 ・友達や先生と一緒に探検(自立活動室)に行く。	・初めての学習に見通しをもって取り組むことができるように「どこで、だれと、なにを」するかについて確認する。 ・教室から移動する際は、「友達や教師と一緒に行く」ことができるように、ひも電車を使う。
自立活動	・一緒に学習する先生に挨拶(自己紹介)する。 「ぼく(わたし)のなまえは〇〇です。よろしくおねがいます。」 ・自立活動室の先生に話を聞く。 「一緒に学習する(自立活動)先生の名前は?」	・国語の授業で学習した自己紹介をする。一人でしたり教師と一緒にしたりして、児童の実態に応じていろいろな方法で自己紹介する。 ・「だれと・なにを」するかについて確認したり、使用する際に気を付けることなどについて話を



	「自立活動室には何がある？」 ・自立活動室の感覚遊具で遊ぶ。 ・友達や先生と一緒に身体を動かす遊びを行う。	聞いたりして安全に活動できるようにする。 ・感覚遊具等で遊ぶ活動を通して、身体の動きな の実態把握を行う。
児童の様子 (評価)	・学習に関連する絵本を教材として取り扱い、児童の興味・関心が高い、読み聞かせから学習に入る ことで、椅子に座って落ち着いて学習に向かうことができた。 ・初めての「国語」の授業であったが、学習内容を分かって、自分から積極的に活動に取り組もうと する（自己紹介しようとする）姿が見られた。 ・自立活動室へ移動する際は、「友達や教師と一緒に」の約束を守って、友達と一緒にひも電車で移 動することができた。 ・自立活動の先生に、国語の学習で行った自己紹介を一人ずつ行い、一人で挨拶したり、教師と一緒 に挨拶したりすることができた。 ・次の週の学習について話をすると、「また、（学習）したい。」、「〇〇先生と一緒にしたい。」 など、一緒に学習する先生の名前を覚え、学習を楽しみにする姿が見られた。	

また、スタートカリキュラムの期間、他学年と交流する学習を行った。6年生が作成した学校紹介ビデオを視聴し、図書館やグラウンドなど学校の施設や学校行事について知ることができた。6年生にとっては、毎年4月当初に行う学校探検と関連付けられた教科別の指導「国語：あいさつをしよう」で実施されており、これまでの学習経験を踏まえた段階的な指導として位置付けられている。6年生からの学校紹介ビデオを視聴した児童からは、「図書室に行ってみたい。」、「遠足が楽しみ。」などの感想が聞かれ、1年生にとっては、これまで利用したことがない図書室等の学校の施設について知ったり、これからの学校生活において実施される行事について知ったりすることで、より期待感をもって学校生活を送ることにつながった。コロナ禍で直接的な交流が難しい中、6年生との交流学習を通して行うことができ、学習をきっかけに6年生が1年生に言葉を掛けるようになったり一緒に遊んだりする姿が、より多く見られるようになった。

さらに、季節の植物の栽培では、2年生が1年生にプレゼントしてくれた朝顔の種を植える活動を行った。この種は、2年生が昨年度、自分たちで花を咲かせて採った朝顔の種である。2年生は、自分たちが植えた朝顔の種を1年生にプレゼントする学習を通して、前年度の学習活動を振り返ったり1年生にメッセージを書いたりする学習を行っている。数日後、芽を出した朝顔に気付くと2年生を呼んで一緒に観察する児童の姿が見られるなど、異年齢間のかかわりを深めることができた。

#### 4. 考察

##### 4. 1. 子どもの変容について

児童の詳細な変容については、週1回開催される学年会において職員間で共有し合う場を設定した。本実践を通して、以下のような児童の変容を確認することができた。

スタートカリキュラムの期間及び1学期を通して、ほとんどの児童が大きく体調を崩すことなく元気に登校することができた。学校生活に慣れてきて、挨拶など自分からできるようになるなど、児童同士や身近な教師とのかかわりの中で多くの成長が見られた。また、学校生活に見通しをもって、いろいろな学習に意欲的に取り組む姿がうかがえた。同時に、家庭でも自分から学校へ行く準

備をするなどの変容が保護者から報告されている。学習面においては、友達や教師とのかかわりを楽しみながら笑顔で取り組んだり、友達の存在を意識し互いに高め合ったり姿が見られた。対人関係面では、入学当初はトラブルが見られたが、一緒に遊ぶ中で名前を呼び合ったり友達を意識してかかわったり、おもちゃの貸し借りなどを通して友達とのかかわり方について学んだりするなど、仲良く遊ぶ姿が見られるようになってきた。教師が、学校生活の様々な場面において、児童の気持ちに共感的にかかわることで、教師に信頼を寄せて思いを伝えたり教師の働きかけに応えたりしようとする姿が見られた。保護者との連携においても、連絡帳等を通して児童の実態や成長を共に語り合いながら指導に当たることができた。5月半ば、運動会という大きな行事を経て、学校生活にも慣れ見通しをもって学習活動に取り組むことができるようになるとともに、様々な学習に自分から「やってみたい。」という気持ちをもって意欲的・主体的に学びに向かう姿が見られた。そのことが、6月からの単元「あそんでつくろう」の中で、児童自身が色々な素材で遊びながら学習を展開させ、積極的につくる活動へ発展させることができたと思われる。このようにスタートカリキュラムでの学習が、その後の児童の主体的な学習の基盤を培うものであることを実証することができた。

ここで、令和3年度に担任したA児の変容からスタートカリキュラムの意義について考察したい。

A児は自閉スペクトラム症であり、入学当初は言葉でのやり取りが難しく、見通しをもって行動することが難しかった。入学式前日も、式に見通しをもって臨むことができるようにと会場を見学に来たが、落ち着かなく会場に入ることができなかった。入学後も、遊びから学習への切り替えができず、学習に参加できずにいる状況があった。A児については、入学前及び入学後に保護者を含めた関係者が集いケース会を実施している。入学前の支援状況から、まずは身近な教師との信頼関係を築くことが大切であると考え、安心して学校生活を送ることができるように情動的な関わりを通じた基本的な信頼関係を育みながら指導に当たった。保護者も入学に際し大きな不安を抱えており、連絡帳等で学校での様子等についてできるだけ丁寧に伝え、家庭での情報を共有しながら連携を深めた。入学当初は、朝の会が始まる前に担任や友達と十分に遊んだり、体育の学習においても本児が好きな固定遊具遊びを取り入れたりして、遊びを学校生活の中心に据えた。遊びを通して共感的にかかわることで児童との信頼関係を築くことができ、入学当初は言葉でのやり取りが難しい場面があったが、理解している言葉は多く、情緒的に安定することで教師の働きかけに応じてコミュニケーションを図ることができるようになってきた。学習活動にも、休み時間に遊べる見通しをもつことで、気持ちを切り替えて落ち着いて取り組むことができるようになった。さらには、教師の働きかけに応じて苦手なことにも挑戦する場面が見られるようになってきた。

このように、入学後のスタートカリキュラムにおいては、ケース会等を通して入学前の実態や支援内容を把握することで、より児童の実態に応じた学習活動を計画し指導・支援に当たることができた。さらに、入学後のケース会においては、スタートカリキュラムを通して成長が見られたA児について、放課後等デイサービスとも学習状況や支援内容を共通理解し、コミュニケーションや食事面などの課題に対する共通の取組につなげることができた。

#### 4. 2. カリキュラムの編成について

最後に、本スタートカリキュラムが、児童の学びにつながるカリキュラム（実践）となっていたかについて考察してみたい。小学部1年生のスタートカリキュラムにおいては、「安心して元気に楽しく学校生活を送る子ども」の姿を目指し、全体指導計画と個別の指導計画との整合性を図りながら、複数の1年生担任間で共通理解し指導を行っていく必要があった。本実践では、担任の思いや願いを語り合いながら指導を進めるとともに、目指したい児童の姿に迫っているか、目指すためにはどうすればよいかなど、子どもの姿を基にした語り合いを行うことで、より児童の実態と変容に応じたカリキュラムとすることができた。令和3年度は学級担任間での話し合いであったが、令和4年度は学年全体に話し合いを広げることで、1年生全体のスタートカリキュラムとしての実践の拡充につながった。

また、この2年間の中では多様なニーズのある児童が在籍し、入学後1か月だけでは十分な成果が見出すことが難しい児童もいた。そのため、1学期間を通してスタートカリキュラムのねらいを達成することを目指し、実施スパンを延長するなど柔軟に対応した指導の形態もあった。その結果として、より児童一人一人の実態に応じて、新しい学校生活にスムーズに移行できるスタートカリキュラムの実践につながったと思われる。

さらに、他学年との交流学習を取り入れ、教師や友達との関わりを広げたり、必要な力を育むための自主的な学びに向かう力を育んだりすることができるような実践により、系統的・段階的な指導や意欲的・主体的な学びにつながられた。スタートカリキュラムの実践については、学習活動や単元間のつながりはもちろんのこと、学年間のつながりを意図するカリキュラムの開発も重要であることが示唆された。

#### 5. まとめと今後の課題

本稿では、これまで特別支援学校で進められてきた小学部入学時における指導計画と実践を、スタートカリキュラムの視点から見直すことを試みた。特に、就学前の園や福祉事業所等での支援との接続を深め、個別の指導計画に生かすとともに、1年時のスタートカリキュラムのデザインにつなげた。また、カリキュラムの作成に当たっては、教科横断的な視点と系統性を踏まえた指導計画を作成し、「安心」「成長」「自立」の観点から指導の充実を図った。その結果、児童は、教師や友達、上学年の児童などつながりながら意欲的に学習に参加するとともに、見通しをもって安心して学校生活を送る姿が見られた。教師側としても、学年部全体で児童の発達状況等の情報を共有し、授業の構想から実践、更には授業研究を日常化することで協働的な取組を進めることができた。さらに、一人一人の実態に応じ柔軟に対応できる実践力とチーム力の高まりを感じられたことは大きな成果であった。

今後は、学部や学校全体の取組として、小学部1年生での実践を基に、中学部1年、高等部1年においてもスタートカリキュラムの視点に立った小中高一貫した全体指導計画の作成に拡充してい

きたい。そのためには、学びの連続性を重視した全職員参加型の協働的な体制づくりを充実させる必要があると思われる。また、本研究では、入学以来、徐々に子どもの生き生きと活動する様子や安心して学校生活に適応していく姿を見ることができたが、スタートカリキュラムの作成との関係を詳細に明らかにするまでには至らなかった。客観的な評価方法の確立については、今後の検討課題としたい。さらに、入学後の支援の充実には、保護者や放課後等デイサービスなどとの連携は必要不可欠な要素となっている。児童にかかわる関係機関の参画についての有効性までは言及できず、今後の課題として残された。

最後に、本研究に協力していただいたK特別支援学校の管理職、関係の先生方、子どもたちに心から謝辞を申し上げたい。

## 参考文献

- 安藤哲也(2020) 幼少の遊びの連続性に着目した小1担任の意識に関する事例的考察 日本教科教育学会誌 第43巻第1号 pp. 21-30
- 厚生労働省(2017) 保育所保育指針
- 厚生労働省(2019) 令和元年社会福祉施設等調査 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/23-22.html>  
(令和4年11月12日最終確認)
- 児童発達支援ガイドライン(2017) 厚生労働省
- 全国児童発達支援協議会(2017) 保育所等訪問支援の効果的な実施を図るための手引書
- 丹野哲也・武富博文編著(2018) 知的障害教育におけるカリキュラムマネジメント 東洋館出版社
- 松寄洋子(2018) 幼児教育の学びを生かしたスタートカリキュラムの実践 千葉大学教育学部研究紀要 第66巻第2号 pp. 91-98
- 文部科学省、国立教育政策研究所、教育課程研究センター(2015) スタートカリキュラムスタートブック
- 文部科学省(2021) 新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議報告  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/154/mext\\_00644.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/154/mext_00644.html)  
(令和4年11月12日最終確認)
- 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領
- 文部科学省(2017) 小学校学習指導要領
- 文部科学省(2017) 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領
- 文部科学事務次官(2013) 学校教育法施行令の一部改正について(通知)
- 文部科学省初等中等局長、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長(2018) 教育と福祉の一層の連携等の推進について(通知)